慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Z・K・ブジェジンスキー著 山口房雄訳 ソビエト・ブロック
Sub Title	
Author	加藤, 寛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.11 (1964. 11) ,p.937(81)- 938(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19641101-0082
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19641101-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る挙に出た時、かかる事情を背後に持った。いわば強い大衆的反発である。ブルジョワがフェルムの賃貸者として勢力を充実しようとする過程でかかる動きは無視できない。こうしたなかでブルジョワはフェルミエとの連帯を盛上げ、対処した。ブルジョワとフェルミエは同体である。そしてこうした連帯感はいよいよ強化されていった。しかしそのこと自体反ブルジョワ勢力の急速な抬頭を物語るものにほかならない。ブルジョワが村で勢力を持った時、彼は早々に彼に反発する側からの強い攻撃を受けたのであった。ブルジョワの苦悩は増した。

【終りに】 フェルミエはブルジョワの出先として村に君臨した。彼はブルジョワの意を体し、村で兼業をよぎなくされた層に支配者として対す。彼は支配し同時に支配される存在であった。しかしそれが実際どれほどの意味を持ったであろうか。はなはだ疑問である。ブルジョワに対しフェルミエは約束した貨幣の一定額を支払うべく苦慮しなければならない。調達できないことしばしばである。このため彼は頼るべき唯一の役畜も手放した。彼は土地を売却、これを元手に役畜を購入、フェルミエとして徹底を策した。しかし今やそれが大きな見込み違いとなった。彼はフェルミエ転進でかえって苦痛を増した。自分で選んだ途であるが、結果は惨憺たるものであった。しばしば彼は物貰いに転落していった。もちろん同族間の結束をかためることで彼は自衛手段を講じた。事実ブルジョワに対する支払に窮した時、相互扶助が約束されている。しかしそれも所詮は水の泡であった。フェルミエはいわば農村のブルジョワとして尊敬を受けた。しかしそれは単に高い地位に対するものにすぎない。経済的実態はといえば非常に不安定であった。しばしばそれを深化すべく謀略がめぐらされた。彼の地位は高い。にもかかわらずそれはブルジョワに依存していた。とにかく他に対し全面的に依存しての生活である。一般にそれがいかなる結果を招くか。フェルミエの動静はよくこの間の事情を物語るものといわなければならない。ラブルールからフェルミエへ、そして破局。こうしたなかでブルジョワのフェルム経略は思うにまかせない。小論でベナル氏はそう断ずるのである。原題は Marc Vénard, 《Une classe rurale puissante au XVIIe siècle: les laboureurs au Sud de Paris》, Annales (E.S.C.), n°4—1955 に所収。私は当面「フランス地主制の研究」と取組んでいる。本稿はその第一部中、最終章執筆のため利用した素材の一部をまとめたものである。続稿を本誌次号以下に予定している。第一部では先進地域における地主制を扱う。

新刊紹介

岡倉古志郎
蠟山芳郎編著
『新植民地主義』

本書はアジア・アフリカ研究所の共同研究の成果である。I 総論 新植民地主義の本質 は比較的新しい用語であり、定義も明確でない「新植民地主義」の理論である。植民地があるところには植民地主義も存在するから、そういう意味ではローマの植民地主義などというものを考えてもよいわけだが、問題にする植民地主義は帝国主義時代の植民地主義であり、これを現代植民地主義または旧植民地主義と呼んでいる。現代植民地主義とは、一個のオーガニズムとしての、帝国主義の植民地・半植民地・従属国にたいする支配と収奪の全体系のことであり、また、それに関連した帝国主義諸国間、独占資本相互間の関係の総体である。したがってこれは相当包括的な概念であり、帝国主義の植民地に関するものであるといってもよいであろう。それでは新植民地主義は何かというと、これも植民地主義には相違ないが、第二次大戦後、とりわけ一九五七年以後、一方で社会主義世界体制の力量と国際的影響力が急激に成長し、他方で民族解放運動の急襲による植民地制度の崩壊がいちじるしく進み、資本主義世界における階級闘争が激化し、資本主義体制の衰退と腐朽がいっそうはげしくなった、いわゆる資本主義の全般的危機の第三段階における植民地主義の現象形態である。

新植民地主義も旧植民地主義とその本質は変らないが、歴史的条件は変化し、植民地はほとんど独立してしまったので、現象形態は変化せざるをえない。つまり政治的に譲歩しても経済的にはいぜんとして支配をつづけるためにはどういう形態をとるかということである。もう一つの新植民地主義の特徴は、その主柱がアメリカ帝国主義である、ということである。

II 各論 ではアジアからは、インドと沖縄、マレーシア連邦、中近東からは一般情勢のほかにイスラエルと石油の問題、アフリカからは一般情勢のほかにコンゴ、最後にラテン・アメリカをとりあげ、新植民地主義の実証的分析を試みている。新植民地主義の性格上、実質的な支配・従属の関係は表面を蔽われているので、その摘出はなかなかむずかしい。各論はやや駈け足視察的傾向があり、汽車の窓から移り変る風景を眺めているような感じである。時には汽車からおりてゆっくり歩いてみたい人にとっては、不満な点もあるが、巻末の資料と文献を含めて、執筆者の真面目な努力は認めなくてはなるまい。(岩波書店・A5・二七七頁・五五〇円)

—矢内原 勝—

* * *

Z・K・ブジェジンスキー著
山口房雄訳
『ソビエト・ブロック』

共産主義というとき、私たちはまずソ連を考えるが、同じ共産主義国でも、多くの差異があって、今や、一口に共産主義国とはいえなくなった。そのような現在の多様性も実は何度かくり返した統一と分裂との結果であったことはいうまでもない。著者はこの経過を

四つに分けている。

第一期（一九四五―四七年）は主として戦後処理の時期であり、反共産主義グループの弱い所ほど早く共産党政権が樹立されていった。「ところがいざ権力が固まってくるにつれて、共産主義建設の仕事は複雑である。個個の特殊状況に対する具体的で明快なイデオロギーの指針がない。人間の創意工夫が広範なイデオロギーの枠を補っていかねばならないということがだんだん分ってきた」。この時期を「多様な制度とイデオロギー」とよぶ。

第二期（一九四七―五三年）は、共産党の指導的役割を重視するにつれ、ソ連体制のもつイデオロギー的意味が強調されるようになった。かくてスターリン主義が暴れまわる「制度とイデオロギーの画一化」の時代であった。

第三期（一九五三―五六年）は、スターリン死後、その経済政策の失敗と権力の苛酷さが、スターリン批判をよびおこし、その結果、党権力の強さの度合により各国に大小の反応をよびおこした。「制度とイデオロギーの多様性」である。

第四期（一九五七―五九年）は、「スターリン主義の神話をうち破ろうとするフルシチョフの政策は、共産主義陣営内にさまざまな不安をよび起した。それはソ連がハンガリアの暴動を弾圧する決意を示したことによって、いくらかは解消された」。「ソ連の指導者はもっとありふれていて、しかもそれほど間に合わせではない治療薬、すなわち経済的紐帯をつよめ、政治制度上の結びつきを再建するのに大童であった」。かくてこの時期は「多様な制度と画一的なイデオロギー」ということになる。

著者ブジェジンスキーは、若冠三十六歳の少壮ソ連研究家だが、ハーバード大学ロシア研究所でもその研究は高く評価され、ケネディ・ブレーンの一人として、アメリカの対ソ政策は彼の答申による所が多いとされている。本書の一つの特色は、一般に民族主義と共産主義の差異と考えられている、共産圏の分裂と統一とを、共産党権力とイデオロギーとのからみあいでつかまえていることである。第二の特色は、戦後各国共産主義の歴史を一望にまとめたその努力と功績である。従来この時代のまとまった分析がなかっただけに貴重なものであり、将来の展望の基礎となろう。（弘文堂・昭和三九年七月刊・B6・五〇三頁・一二〇〇円）

―加藤　寛―

＊　＊　＊

八二（九三八）

R・ハイルブローナー著
浜田清夫訳

『一〇〇万人の経済学』

この書は、原書名を『The Worldly Philosophers――俗界の哲学者たち――』といい、経済学者とは、これまで、哲学の図式のなかに、あらゆる人間活動のうちで最も世俗的なもの――人間の富に対する衝動――を組み入れようとつとめてきた人々であり、この努力の歴史こそ経済思想の歴史であるという考え方にもとづいて、経済学を形成し、発展させてきた偉大な経済思想家たちの生涯と時代、そしてその関連のもとに彼らの思想を見事に浮き彫りし、魅力ある筆致で描写している。

この書は、一九五三年に出版され、米国でベストセラーとなり、学生は勿論、ビジネスマンにまで愛読された経済書であり、しかもこの通俗性が、この書のもつ学問的な水準を少しも損っていない点で、他に類のない書である。このことは、米国においてハーヴァードをはじめ、多くの大学が、この書を初級用の経済学史教科書に採用していることでもわかるであろう。

まず、この書は、人類が俗界的な富の集積を重んずる社会に転換した・中世から近世にいたる混乱期を描く。この時期は「経済革命」と呼ばれる時代であり、富のために、自利心を満足させるために、人間が合理的に行動する時代への移行過程である。そしてこの革命のなかで、形成された俗界の秩序に、指導的な哲理をあたえた思想家としてスミスがとりあげられる。

しかし、スミスによってリードされた素晴しく発展する・この世界は、次の世代のマルサスとリカルドには悲観的にみえはじめる。すなわち、「経済革命」の限界、そしてその否定的な要因に、彼らが気がつきはじめた。だが、彼らはこのような態度をとりながらも、まだ、理性、秩序および発展に強い信頼をおき、その立場から社会の変化をみつめようとする。

つぎの世代に、この革命がもたらした経済法則の美名のもとで残酷さが合理化される現実から眼をそむけ、空想の美しい世界を夢みる夢想家たちの時代がくる。しかし、この苛酷な現実を直視し、悲惨から人類を救う可能性を信じ、しかも制度の必然的な変革を通して、現在ある制度を無情に否定することがその唯一の道であると信ずる偉大な経済思想家があらわれた。マルクスである。

マルクスの「死の宣告」にもかかわらず、この制度は死滅じなかった。それどころではなく、ヴィクトリア朝の好況が、英国に訪れ、むしろ進歩と楽観主義が人々にひろまってきた。そこでは、エッヂワース思想に極端にみられるような・人間が快楽的機械であるという仮定にもとづく、単純化された抽象の世界に現実をおきかえ、すなわち、心理的な快楽加算機の調整如何で、一種の経済的天国が生れるという哲理がうみだされた。しかし、この公式世界に自己満足している経済学専門家たちに対して、下界では悲しい現実を指摘するアマチュアたち――ホブソンやヘンリー・ジョージ――が生きていたのが、この時代の特徴であった。彼らは、学界では、異端者扱いにされ、その価値を認められなかったが、俗界の哲理にあたえた影響は大きかった。

この時代に、経済思想は新しい土地で発展する。それは野蛮で未開な新大陸である。なにごとにも懐疑的なヴェブレンは、古い哲理をことごとく疑い、新しい土地に生じた富の制度を納得いくまで追求する。ここでは、現実の人間は、合理的であるよりは、動物的本能にもとづく不合理な行動をとるものであり、このような仮定で、富の哲理を分析しようとする。

ヴィクトリア朝の好況が終ったとき、古い世界でも、新しい世界でも、一つの病理的現象が発生した。失業である。この病める世界に良い処方箋をあたえたのがケインズであった。そして今日の世界でも、これまで人類がつづけてきたと同じように、俗界の富の諸問題に悩み、そこから哲理を導き出そうという試みがつづいているのである。

著者の立場は、米国において伝統的な制度学派の立場である。著者はミッチェルの「Lecture Notes on Types of Economic Theory」の制度学派の学史的な分析を基調にしているといえよう。現在、制度学派的な思考は、